



日野 藤吉
(利府町教育委員会提供)

「いったいどうしちまったんだ。」

「せっかくの美しい田んぼを……。バカ者だ、藤吉さんは。」

藤吉が、梨の木の苗を植え始めたときの村人たちのことばです。

日野藤吉は、嘉永二（一八四九）年、利府村（現在の利府町）に生まれました。利府村森郷にある農家にむこ入りした藤吉は、家業の米づくりに熱心に取り組むまじめな青年でした。そのころの利府の農家の多くは、収入のほとんどを米づくりに頼っていました。その当時、米づくりでは、日照りや長雨、低温による不作の年があり、農家の生活はけっして楽ではありませんでした。

ある年、天候が悪く米はもちろん他の農作物も不作で、村人たちは売るための米どころか、自分たちが食べるものにも不自由するほどでした。これまでもいねいに肥料を加えて何度も耕して土づくりをしたり、雑草や水の管理に気をつけて田を耕したりして、どの農家よりも手間をかけてまじめに米づくりに取り組んできた藤吉も、米が取れずすっかり気落ちしていました。

「気晴らしにつりにでも行くか……。」

つりが好きだった藤吉が石巻につりに行ったときのことです。途中、ふと近くの畑を見ると梨の木があるのに気づいた藤吉は、その木においしそうな実がたくさんっているのを見つけ、腰がぬけるほどびっくりしました。

「米が取れなくても梨は実るのか。」

その立派な梨の木に近づき、梨の実を食い入るように見つめて藤吉は考えました。

「梨は米ほど天候に左右されないということか。しかも、売れば現金がすぐに手に入る。それなら、利府にも梨を植えることはできないだろうか。でも、どこに……。どうやって……。」

それからというもの、藤吉は我が子のように大切に世話をして耕してきた田んぼを、何日も何日もじつと見つめる日々が続きました。

ある日、藤吉は自分の水田の半分をつぶして、梨の苗木を百五十本植えました。その翌年も百五十本植えました。ふだんからまじめでがんこ者とさえいわれていた藤吉が、だれよりも大切に手入れしてきた田んぼをつぶして梨の苗木を植えている姿を見て、村の人たちはとてもおどろきました。

「いったいどうしちまったんだ、藤吉さんは。」

「あんなに大切にしていた田んぼを……。失敗したら田も畑もだいなした。」

村人たちは、藤吉の姿を冷ややかな目で見つめていました。藤吉が三十三歳のときでした。

藤吉が選んだ梨栽培の道のりは、決して平たんなものではありませんでした。『桃栗三年柿八年』といわれるように、果物は実がなるまで長い年月がかかります。梨はさらに長い年月がかかるといわれています。石巻の友人に栽培方法を学んだ藤吉は、米づくりの時にもましてまじめに働きました。米が収穫をむかえる秋には、梨の木が大きく育つように肥やしをまいて土づくりをし、冬になると千葉から梨栽培の農家をまねいて剪定の技術を学びました。一つ一つの実に日を当たりやすくするように棚づくりをするのも冬の仕事です。米づくりの農家がひまなときも、梨栽培は休むひまがありません。そして春になって、ほかの農家たちが田植えを始めるころは、梨の花を一つ一つ取っては花粉を取り出し、花粉づけをし、小さい実を切り落として大きい実だけ

桃栗三年柿八年
：芽が出て実がなるまでに、桃と栗は三年、柿は八年かかるということ。また、何事も成し遂げるまでにはそれに見合った年月が必要だということ。

剪定：
木の枝を切り、形を整えたり、風通しを良くすること。
棚づくり：
支柱などを立てて枝を高い位置で横に広げていく作業。

を残す摘果の作業を行いました。害虫がつかないように行う消毒は、手間もお金もかかる大変な作業でした。
(本当に梨づくりができるのだろうか。)

(いや、米が取れなくても梨は実っていた。)
けっして裕福ではない農家に生まれ、村人の苦しい生活ぶりもよく分かっていた藤吉は、この梨づくりを成功させることが村人のためになると考え、根気強く梨づくりに向き合いました。鋤を持つ手は、いつしか血がにじむようになっていました。

五年たち、十年たち、藤吉の植えた木は大きく育ち、大きな実がたわわに実るようになってきました。藤吉は、その梨を背中のかごに入れて背負い、塩竈まで売りに行きました。藤吉の梨は、甘くて歯ごたえがあつておいしいと評判になり、飛ぶように売れました。

「藤吉さん、梨づくりを教えてくださいませんか。」
「道具を貸してもらえないか。」

藤吉の成功を見て、村の人々も梨づくりを始めるようになりました。中には、藤吉のことを「バカ者」あつかいした村人も、藤吉のところに来るようになりしました。藤吉はわけへだてなく村人に梨づくりの方法を広めました。はじめて梨づくりを始める村人にも親切に教えました。村人が新しい道具や消毒薬を買うのに困っているときは、梨を売ってたくわえていたお金をおしらず貸しました。

明治三十八(一九〇五)年、藤吉が五十六歳の時、宮城県は大凶作に見舞われました。米の収穫はいつもの十分の一に激減して、収入がない多くの農家は出稼ぎに行きました。学校では、教科書や学用品を買えず、弁



現在の利府町の梨畑(開花時期)(利府町教育委員会提供)

当さえ持参できない児童が増えました。しかし、梨はそれほど影響を受けず、利府の農家は梨づくりによって安定した収入を得られました。

四十年以上にわたって梨栽培を広め、品種改良に力を注いだ藤吉は、七十七歳でその生涯を閉じました。藤吉の努力によって、利府の梨農家は多いときには三百五十五軒にも上りました。今では、九月ともなれば、利府の道路のいたる所で梨の路上販売店が軒をつらね、秋の風物詩ともなっています。旧利府町役場(今の十符の里プラザ)の向かい側に、藤吉が植えた『真鍮梨』の木が枝を広げて植えられています。その横には、利府の村人を救った「大恩人」として藤吉をたたえる『頌徳碑』がたたずんでいます。



真鍮梨(利府町教育委員会提供)

摘果：余分な果実を取り除き果実数を制限する事により、大玉の果実を生産するため、品質の良い果実を選別して、高品質な果実を収穫するために行う作業。

風物詩：その季節をよく表している物、事柄。
頌徳碑：その人物の功績や名譽をたたえる記念にするため文字を刻んだ石。

日野 藤吉

日野 藤吉は、嘉永二(一八四九)年、現在の利府町に生まれた。米づくりに頼っていた利府の農業に梨の栽培を取り入れた。栽培が成功し、利府の農家は天候に大きく左右されず収入が得られるようになり、のちに大恩人とたたえられた。